

## 研修報告

### 「イギリスの大学院での学び」

高松功太郎

私は教職員研修制度を利用し、2017-2018 年度に University College London, Institute of Education (ロンドン大学教育研究所：以下 IoE) で MA TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages: 英語以外の言語を母語とする人々への英語教授法修士課程) コースに在籍し、英語学習におけるモチベーション (動機付け) と外国語学習不安についての研究を行った。また、ホームステイでの滞在を通し、現地での生活を体験し、実際の生活場面で英語がどのように使用されているのかを経験した。

#### I. はじめに

今回の研修の目的は、主に以下の 3 点である。

- ①英語教育における最新の知見の獲得する
- ②MA TESOL コースを修了し、修士号を取得する
- ③現地での生活を通し、英語がどのように使用されているかを実際に体験する

本研修報告では、①②は主に大学院での学びから、③はホームステイを含めたイギリスでの生活から、それぞれ記す。

#### II. 大学院での学び

##### 1. 大学院の概要

今回私が留学した IoE は、1902 年に設立された教育に特化した大学院であり、2014 年に同じロンドン大学に属する University College London (ロンドン大学ロンドン校：以下 UCL) の教育部門として統合された<sup>1)</sup>。UCL は 1826 年に設立されたイギリスで 3 番目に古い大学であり、当時のキリスト教価値観中心の学术界に対するカウンターとして誕生した歴史を持つ、非常にリベラルな校風が特徴の総合大学である<sup>2)</sup>。そのため、女性や留学生にもいち早く門戸を開いた歴史があり、日本からも、幕末・明治期に伊藤博文や夏目漱石らが学んでいる。そのような歴史的背景から、現在でも世界中から留学生が集まっており、国際色豊かなキャンパスであった。また、メインキャンパスはロンドンの中心地に位置し、ロンドン大学本部や大英博物館まで徒歩で数分と、文化的にも豊かな場所に位置している。

私の在籍した MA TESOL コースは、9 割以上の学生がイギリス国外にルーツを持っており、非常に多様なバックグラウンドを持った国際色豊かな集団であった。コースの特性上、各国で英語教育に携わる学生が集まっており、授業内外でそれぞれの母国の英語教育について情報を共有し、議論を交わす機会にも恵まれた。また、国費派遣や国際団体の奨学金を利用した学生など、優秀な同級生が多く、彼らと共に学ぶことで非常に多くの刺激を受けた。



写真 1 クラスメイトと

##### 2. 大学院での授業

大学院では、自身の研究 (修士論文執筆) と共に、下記の授業を受講し、英語教育に関する学びを深めた。

- Fundamentals of Second and Foreign Language Teaching
- Second Language Acquisition
- English in Diverse World Contexts
- Language Testing and Assessment

・Dissertation Applied Linguistics and TESOL

どの授業も、国際的に第一線で活躍する教授陣によって開講されており、第二言語（英語）教育に関する最新の理論や情勢を学ぶことができた。その中でも、“English in Diverse World Contexts”の授業では、現在の英語を取り巻く世界の状況を客観的・批判的に見つめ直し、英語を学ぶことのプラスの面だけでなく、その弊害や英語が世界に及ぼす影響について非常に深く学ぶことができた。この授業で学んだ内容は、英語教師として今後も常に意識していかなければならないと強く実感させられるものであった。また、各授業の課題として出される多量の論文からも、多くの知識とインスピレーションを与えられ、それらをどう授業に活かしていくのかを考えながら日々過ごすこととなった。

### 3. 研究と修士論文

研究の集大成として、第二言語学習における不安とモチベーションをテーマに修士論文を執筆した。6年間の英語教師としての経験から、生徒の英語学習に対するモチベーションには興味があり、それを研究テーマとすることは当初より決めていた。学習不安に関しては、在学中に自分自身の英語学習の経験を振り返った際、中高生時代は英語学習に非常に強い苦手意識をもっており、授業で常に感じていた不安感を思い出したことが大きく関係している。そこから、教員の立場のみで英語教育について考えるのではなく、学習者の立場に立つことの重要性を改めて認識し、研究のテーマとして取り扱うことを決めた。また、自分自身が久しぶりに学生（学習者）となり、生徒の立場でモチベーションと不安の両方を経験したことも大きな要因となった。

最終的には、自由学園女子部の生徒を対象に、英語学習に対するモチベーションと学習不安の関連について研究を進め、“A study on the Effect of the L2 Motivational Self System on Foreign Language Anxiety Among Students in a Japanese Private Girls’ High School”（邦訳：『自由学園女子部高等科における「第二言語における動機付け自己システム」の「外国語学習不安」における影響の研究』）

のタイトルで、修士論文を執筆した。研究では、女子部高等科生を対象にインタビューと質問用紙によるアンケートを行い、生徒たちの英語学習に対するモチベーションと不安の関連を調べた。その結果、英語学習に対して内的により強いモチベーションをもつ生徒は学習意欲がより高く、そうでない生徒に比べて学習不安がより少なかった。その逆も同様であり、英語学習に対する内的なモチベーションの強弱が、学習不安の強弱にも大きな影響があることが確認された。これらの結果から、今後はモチベーションを高めるとともに、学習不安をより小さくできるような授業を行いたいと強く意識するようになった。

## III. イギリスでの生活

### 1. ホームステイ生活

上述の目的③のため、現地の滞在にはホームステイを選択した。ホームステイ先は、南ロンドンのClaphamエリアに位置し、ホストファミリーは、父はパブの不動産鑑定士、母は画家、2人の娘はそれぞれソムリエと大学生であった。家族とは毎晩の夕食時に、現地での生活から英語に関する疑問、Brexit（ブレグジット：イギリスのEU離脱）に関する政治の話まで、様々な会話を楽しんだ。毎晩の食事は、平日は母によるパイやキッシュなどのオープン料理、週末は父によるサンデーローストと呼ばれる肉料理が出され、どれもとても美味しかった。特に、クリスマスなどの特別な料理や季節ごとの伝統的なお菓子などは、実際に一緒に住んだからこそ体験できた味であり、どれも現地の文化を知る良い機会であった。



写真2 ホームファミリーと過ごしたクリスマス

また、社交的な家族であったため、それぞれの親戚や友人がよく家に訪れており、現地民との交流の機会にも恵まれた。イギリスの家族である彼らのおかげで、現地の文化を存分に味わえた。

## 2. その他

国際色豊かなロンドンでの生活は、日々の通学で利用する地下鉄や町のスーパー、通りを歩いているだけで diversity(多様性)を感じる瞬間に溢れ、毎日が刺激的であった。個人的には、見知らぬ人であっても目と目を合わせて会釈や挨拶をしたり、気軽に会話が始まったりする風土にとっても魅力を感じた。また、苦勞を共にしたクラスメイト達とも、食事に行ったり毎週末集まったりと、お互いの文化を知り合う機会にも恵まれた。

## IV. おわりに

今回の研修では、当初の目的を全て達成することができただけでなく、ホストファミリーや世界中に出来た友人など、様々な人々との素敵な出会いがあった。また、教員の立場を離れ、学習者として一から学び直し、様々な苦勞をしたことも、生徒の気持ちを理解するうえではかけがえのない貴重な経験となった。今回の全ての経験を活かして、生徒の立場をより理解し、その不安を少しでも取り除けるようになるとともに、その先にある英語を通して広がる世界とその楽しさを伝えられる教員を目指し、今後も精進していきたい。

今回の研修の機会を与えてくれた自由学園、温かく送り出してくれた生徒たち、家族、そして現地で出会ったすべての人に感謝し、本報告書の終わりとする。

### 参考文献

- 1 Institute of Education – University College London, <https://www.ucl.ac.uk/ioe/>
- 2 UCL – University College London, <https://www.ucl.ac.uk/>